



ALL APOLOGISE



# 【Main Character】

## Angelica

生き別れていたクリスの愛娘。  
12歳前後。セミロングの黒髪に赤いリボンが特徴的。  
ませて大人びているが、時折子供らしい一面を見せる。  
クリスに血を分け与えられ不死の力を得る。



## Christopher

神を背負う男。年齢は30半ば。  
長い黒髪を首の後ろで結び、よれた白いシャツをいつも着ている。  
好きな煙草はウィンストン。生命の実を食べ不死になる。

「父よ、彼らを赦し給え。その為すところを知らざればなり」

——  
イエスの最期

「ベニスの商人って知ってるか？」

クリスは突然口を開いた。車の助手席に座るアンジェリカは退屈そうに窓から景色を眺め、それに返事を返した。

「なに、それ？ 映画かなにか？」

「映画もあるが元はシェイクスピアの小説さ」

アンジェリカは景色を窓から見るのをやめ、クリスの方へと向き直る。

「どんな内容なの？」

クリスは咳払いをひとつ、そして話し始める。

「そうだな。とある国にキリスト教徒の商人とユダヤ人の金貸しがいた。商人は金貸しに金を借りてこう言う。『この金が返せなければ私は自らの肉体を切りお前にやろう』ってな。さて、どうなったと思う？」

「話の流れから考えれば、商人はお金を返せず自らの肉体を金貸しに差し出すことになったのではないかしら」

「ところがどっこい、そうじゃない。最終的に商人は金を返すどころかそれを踏み倒す。

ましてや金貸しは悪人の汚名を着せられ、全財産を没収されそうになったり死刑にされそうになったり踏んだり蹴ったりさ。結局、そのユダヤ人の金貸しはキリスト教徒に改宗することを条件に難を逃れる。なんとも酷えだろ」

クリスは話し終え肩を竦めてからわざとらしく嘆息をつく。しかし、聞いていたアンジェリカはどうにも腑に落ちない。

「・・・なんだかクリスの偏見と改変が見受けられる気がするのだけでも」

「そんなことねえよ。てめえらが信じる神なんて祿でもねえ奴ってこった」

アンジェリカも溜息を吐く。これは呆れの色が含まれたモノだった。

「——それで？　なんでそんな話を？」

「その話の舞台に今向かっているからさ。イタリアにあるは水の都。アドリア海の女王」とヴェネチアだ」

アンジェリカは眉間にしわを寄せた。そして、困惑の顔を見せながらこう言う。

「……わたし、パスポートなんて持っていないわよ」

「……オーケー。今度歴史と地理の勉強を教えてやる」

“あの街”を出てから幾日経っただろうか。車で街々を移動しているとそろそろ季節の変わり目といったところだ。あいからずのその日暮らして計画性もなく旅をしていた。

しかし、そんな生活も長くは続かない。ナオミから貰ったお金もそろそろ底を尽きる。稼ぎ口など勿論あるわけでもなく、最終的にクリスは決断を下した。

「――ヴェネチアに行くとなにかあるの？」

アンジェリカがクリスに疑問を投げかける。

「友人、……いや、なんだろうな。腐れ縁って奴さ。知り合いがそこで神父をやっているんだ。そして、俺はそいつに貸しがある。そろそろその借りを返して貰おうって話さ」

アンジェリカは「ふーん」とだけ言い残し、また窓から外の景色を見る作業に戻った。

よほどこの旅に飽々としているのだろう。それも当然だ、街に着けば飯を食ってそれで終わり。あとは車の中で雑魚寝だ。ヴェネチアに着いたらアンジェリカの機嫌が直ればいいのか。そうクリスと思う。

ヴェネチアへ行くためにはまずイタリアへ入国する必要がある。そして、ヴェネチアは海に浮かぶ離島である。おそらく橋でもあり車で本島へ渡れるのだろう。……少なくとも今の時点ではクリスはそう思っていた。

それから二時間後、イタリアでの出来事である。

「車じゃ渡れない!？」

クリスは思わず天を仰ぐ。そして、頭を抱えた。

「まずお前はなぜローマなんかにいるんだ。ヴェネチアなんてとくに通り過ぎてるぞ。ローマからだとは高速鉄道か地方鉄道でヴェネチアへ着くが、……まあ、その様子だと地方鉄道だろうな。金があれば高速鉄道を勧めるんだがな」

クリスは公衆電話から例の知人へと電話をかけていた。そちらに行くということ伝えるため、そのついでにヴェネチア本島への上陸方法を聞くためだ。

「はあ……。分かったよ、そこから地方鉄道に乗って本島へ行けばいいんだな？」

「ああ、そうだ。今から乗れば……。そうだな、夜には着くんじゃないか？」

クリスは一旦受話器を顔から離し、耳を疑った。

「な、何言ってるんだお前。まだ今から昼飯でも食おうかって時間だぞ」

「地方鉄道に乗れば七、八時間はかかる。そして、本島へ着いても私がいるのはそこから



また離れたトルチェツロ島だ。残念だが、今日中には私のところにはたどり着けんよ」

クリスは再び天を仰いだ。そして頭を抱えて嘆息を漏らす。

「そう気を落とすな、クリスよ。私はどこにも行かなければ隠れもしない。盛大に迎え入れてやる。だから、ゆっくり来るが良いさ」

「そうか……うん、そうだな。のんびりとアドリア海でも眺めながらそちらに向かうとするさ。ありがとな」

そう言い残しクリスは電話の受話器を置いた。電話ボックスから出て、車の運転席へと戻る。

「どうだったの、すぐに行けそう？」

アンジェリカの問いかけに苦虫を噛んだような顔をしてクリスは答える。

「地球の誕生から考えりやとんでもなく短い時間さ」

それを聞きアンジェリカは肩を竦め、黙りこんだ。クリスも真似するように肩を竦めた。

数時間後、二人はローマのインターシテイ乗り場に来ていた。駅構内は人々でごった返している。

クリスはアンジェリカと離れないよう、手を差し出す。アンジェリカは頬を赤らめ少し恥ずかしそうに、しかしその手を握り返した。

列車はすぐに来た。二人は乗り込み、空いている席へと座る。このまま八時間か……と思うと気が滅入るクリスだが、アンジェリカのほうは列車に興味津々なようで窓から流れる景色をかぶりつくように眺めていた。

だが、それも小一時間ばかりのことだった。次第にアンジェリカも風景を眺めるのに飽き、大人しく座席へと座り直す。その後クリス少しばかり会話をしていたが、それもついに途絶える。

三時間も経てばお互いの顔は曇り、まさにグロッキーと言ったところか。

二人は早くヴェネチアへ着いてくれと願うばかりだった。

ちょうど八時間後。列車はヴェネチア本島へ到着した。

二人はゾンビのようにおぼつかない足取りで列車から降りる。外はすっかり暗くなり、街灯が目立ち始める時間であった。

さて、どうしたものか。クリスは考える。ご飯もまだ食べていない、そして寝床もなけ

れば金もない。とりあえず駅の構内を歩いて食料を調達することにした。

「夜ご飯、パンでいいか？」

「人はパンのみにて生きるにあらず」

「……どこで覚えたんだそんな言葉」

「ローマでそんなこと聞いたの。私はこの言葉に感動したわ。そりやそうよ。パンだけじゃなくてふかふかなベッドだっているもの。ねえ、クリス？」

色々突っ込みどころは満載なのだが、アンジェリカがクリスへ言いたいことはなんとなく分かった。そりやそうだ、ここのところずっと車中泊で碌な睡眠など取れちゃいない。シャワーだって浴びたいだろう。

しかし、所持金だって残り僅かだ。ホテルになんて泊まっている余裕はない。

「お金ならあるわよ」

「……なに？」

アンジェリカは服のポケットから紙幣を数枚出す。これなら確かに一日ばかりホテルへ泊まるであらう。

「どこから手に入れたんだ、それ」

「ナオミさんからね。いざつて時に使いなさいって。クリスは当てにならないから」

あの女郎、どこまで俺を信用してないんだ。クリスにとつてはまさに業腹であるが、しかし、事実この金さえあれば現状助かつてしまう。クリスはやり場のない怒りを嘆息と一緒に吐き出した。

「オーケー。ホテルに泊まろう。今から探せばどつか空いているだろう」

「ナオミさんに感謝しなきゃ。ね？ パパ」

なんとも皮肉ことを言い残しアンジェリカは歩き出す。クリスは反論を諦め、トボトボとアンジェリカの後ろへついていくのであった。

駅構内から出ると冷たい風が吹き付ける。いくら春が近いといえどまだ二月の中頃。アンジェリカは身震いをしてみせた。そんなアンジェリカを見てクリスは自然とアンジェリカの肩を自分の方へと寄せる。

「あったかい、わね……」

「そうだな」

二人はそれっきり喋ることもなく、泊まれそうなホテルを探しに出た。

翌日。クリスとアンジェリカはサンマルコ広場へと足を運んでいた。

「クリス、すごいすごい！　なにここ！　すっごく綺麗！」

アンジェリカはヴェネチアの中心街に入るなり大はしやぎである。昨日はホテルが狭いだとかベットが固いだとかもう散々の言いようで、とても不機嫌だったのだが。今の姿を見るとクリスの口元から自然と苦笑いが出る。

ここサンマルコ広場は寺院や宮殿に囲まれたその名の通り大きな広場だ。サンマルコという名は聖人の名前からきているらしい。ローマもそうだったが、キリスト教とは切っても切れない街であり、クリス自身も切りたくても切れない縁だなと溜息をつく。まあ、今の神がヤハウェなのかキリストなのか、あるいは違う誰かなのか。到底知る由もないので正確に言うとは縁が切れないのは“神と天使”という存在なのだが。

「おい、アンジェリカ。朝食でも食うぞ、こっちこい」

「あら、随分と高みから喋るわね。誰のおかげでその朝食は食べられるのかしら」

「ナオミ様とアンジェリカお嬢様のおかげです、はい……」

よろしい、とだけ言いアンジェリカはクリスへ手を差し出す。クリスはその手を優しく握り返し、ゆっくりと歩き出す。

カフェ・フロリアン。サンマルコ広場にあるカフェのひとつだ。クリスとアンジェリカはオープンテラスにある席へと座り、軽食と飲み物を頼む。

ほどなくしてやってきたのはサンドイッチとコーヒー、それとオレンジジュースだった。二人はサンマルコ広場を眺めながら静かに咀嚼する。実のところ昨日の疲れがまだ取れていない。クリスとしては早く知人の神父がいるトルチェツロ島へ行って身体を休ませたいところだった。

クリスは通りすぎようとしたカフェのウェイターに話しかけた。

「すまない、ちょっと聞きたいことがあるんだが。トルチェツロ島へどうやって渡ればいいんだ？」

「トルチェツロ島ですか？　そうですね、ここサンマルコ広場から水上バスが出ているのでそこからブラーノ島へ。そして、ブラーノ島からまた水上バスを乗り継いでトルチェツロ島へ着きます」

「なるほど。こりやまた尻が痛くなりそうだ。ありがとう」

クリスはそう言いウェイターへ手を振った。

「アンジェリカ、食ったらすぐ出るぞ」

「食事くらいゆっくり食べさせなさいよ。その島だつて逃げないわよ」

「お前はホントに何も知らないんだな。ヴェネチアは今にも沈んでるんだぞ」

「な、なんですって……!?　　そ、そんな！　私、泳げないわよ!?」

「だから、早く水上バスに乗り込む必要がある。ほら、早く食べ」

そう聞くや否や、アンジェリカはそそくさとサンドイッチを口へ放り込む。クリスはその姿が面白くて笑いを堪えるに必死だった。

そして、店をでた二人は水上バスの乗り場へと向かった。

ブラーノ島へは大体一時間余りで到着した。

「クリス、見てみて！　家がカラフルだわ！　なにかのおまじないかしら？」

「どうだったかな。確かこの島は漁師が多くて、それで帰ってくる家が分かりやすいようにカラリングしたつて話だったような」

「へー！　クリスって意外と物知りよね」

「そりゃ、まあ。お前のパパだし？」

「ふーん……」

「なんだよ、その顔」

「別に」

なんだか腑に落ちないクリスは溜息をつく。

「……そなんだと彼氏の一人も出来ないぞ」

クリスがそう言うのとアンジェリカはみるみると真っ赤に染まっていく。

「な、なな、か彼氏なんて別にいらないわよっ！ 私には、その、あの……」

そのままアンジェリカの言葉は尻窄みになり、それから「もう知らない！」とだけ叫び残して一人で歩きだした。

クリスは頭をポリポリと掻き、そして肩を竦めた。

ブルーノ島からトルチェッロ島は十分程度水上バスに乗っていれば着いた。正午を回り切る前に着くとは。また長い時間乗り物に揺られるのかと危惧していたがそれはどうやら杞憂だったようだ。

「ねえ、その神父さんの名前はなんていうの？」

「ん？ イーシュって名前だ。古びた教会で毎日神に祈りを捧げてるみたいだぞ。ご苦労



様なこった」

クリスはイーシュと電話した内容を思い出す。トルチェツロ島はヴェネチアに属する島の中では小さい部類だ。適当に歩いていればすぐに見つかるだろう。そういう話だった。

クリスとアンジェリカは散策するように歩き出す。

「なんだか静かな島ね」

確かに。ヴェネチア本島やブラーノ島に比べると牧歌的な景観でやけに閑散としている。観光客もいることにはいるが、多いと言うにはいささか弱い。

「退屈しそうな島ね」

そういうアンジェリカをなだめるように頭を撫でる。

「飽くまでもイーシュのところで世話になろうって話なだけさ。暇ならまたヴェネチア本島へ行けばいい。そうだろ？」

「まあ、そうね……」

納得が行ったようで、アンジェリカはまた散策を再開した。クリスもそれについて回る。島のほとりをのんびりと歩いていると、それらしき教会をクリスが見つけた。その教会は島に溶けこむようひっそりと佇み、素朴さそのものだった。

クリスたちは教会の中へと入る。聖堂に入ると壁や天井に歴史を感じさせるモザイク画がところ狭しと並んでいた。なるほど、外観の素朴さはこの静謐さに繋がるわけだ。

「この教会はヴェネチア最古の教会だね。私はなかなか気に入ってる」  
気づけばクリスたちの後ろへ男が一人立っていた。

「よう、イーシュ。久しぶりだな、元気してたか？」

「ぼちぼちといった所だな。会えて嬉しいよ、フラテツロ」

クリスとイーシュは挨拶代わりにと抱き合う。そして、お互いが離れた時イーシュはひとつの事に気づく。

「その子は？」

勿論、その子とはクリスの横に立っているアンジェリカのことである。クリスはどう説明しようか迷った。が、なにも隠すようなことでもないので正直に話す。

「俺の娘さ。名はアンジェリカ。長いこと離れ離れになっていたんだ。だから今こうして一緒に旅をしている。サラのことは話したことがあったかな？」

「ああ、覚えている。ということはそのサラとの子か。まさかお前が父親になっているとはな。主も面白いことをなさる」

「ああ、全くそのとおりだ（ルビ）」

クリスはアンジェリカにイーシュへの挨拶を促す。アンジェリカはスカートの裾を摘み、ちよこんとお辞儀を試みせた。

「初めてまして、イーシュさん。お世話になります」

「お世話？」

「え？」

イーシュとアンジェリカは同時にクリスの顔を見る。クリスは慌てるようにして弁明した・

「おっと、まだ言っていなかったな。イーシュよ、今日から俺たちはお前の世話になろうと思うんだ。嫌とは言わせねえぞ？　いつかの借りをここで返してもらおうか」

イーシュは呆れるように両手を上げ肩を竦めた。

「なるほど、そういう魂胆か。急に電話してくるから何事かと思えば。いいさ、お前には確かに恩がある。だがしかし、押し掛けて脅さなくとも私はその要件を受け入れていただろう。お前はもう少し人を信用するべきだな」

「むう……」

「我が主はこう言われた。隣人を愛せと。その隣人とは誰なのか。それを善きサマリア人として譬え、」

「おおーっと！ オーケー！ オーケー！ 俺が悪かったよ！ だから、長つたらしい説法なんてやめろ。俺の脳みそがありがたさで壊死しちまう。俺はアンデルセンのお伽話聞いてるほうがまだ幸せだ」

そう言つて頭を抱えるクリスを見てイーシュは大きく笑つてみせた。

挨拶も済んだところで、イーシュは教会近くの住居へと二人を案内する。クリスはイーシュに教会には住んでないのかと尋ねる。イーシュは苦笑いをしながらそれは神に足を向けて寝るようなものだと言ふ。基本的に神父は司祭館というところで寝泊まりするようだ。

その司祭館に辿り着く。見た目は教会と同じく素朴な一軒家だった。その玄関から室内に入り、クリスとアンジェリカは二階の部屋へと案内される。

二人で一部屋。狭い空間にベッドがひとつ。しかし、それなりには清潔感があった。クリスはあの屋根裏部屋での生活を思い出す。アンジェリカもそのよう、お互いに見つめ合い少し笑つて見せた。

「悪いがこんな部屋しかないんだ。せめてベッドが二つあればな……」

「いいや、この部屋でいいよ。俺達にはむしろちょうどいい。恩に着るよ、イーシュ」

イーシュはそうかと言い安心してみせた。それから自分は聖堂の方へ戻ると言い残し司祭館から出て行った。

さて、これからどうしようか。そうクリスが考えるも束の間、アンジェリカはトコトコと走りだしベッドへ飛び込んだ。

「おいおい、アンジェリカ……って」

アンジェリカにはもうクリスの言葉は聞こえていないだろう。すでにすやすやと寝息を立てて眠っている。よほど長旅で疲れていたのだろう。しょうがないなとクリスは苦笑しながら溜息をついてみせる。

クリスは部屋を出て教会の方へと向かう。イーシュと話したいことがあったからだ。

聖堂内へ入ってイーシュを探す。しかし、姿が見当たらない。一体どこに行ったのか。クリスは限なく探し歩いてみる。すると、聖堂の奥に小さな部屋があることに気づく。

「イーシュ？　ここにいるのか？」

呼びかけながら部屋にはいると机に向かって座るイーシュがクリスの方へ振り向いた。

どうやらここはイーシュの書斎らしい。橙色の電球が仄かに部屋を照らし、棚に並べられた本が鈍い光を反射していた。

「どうした、クリス。なにかあったか？」

「いや、ちよつと相談があつてな。今大丈夫か？」

ああ、問題ないよとイーシュは座つていた椅子をクリスに譲ろうとする。クリスは首を振つてそれを軽く断り、部屋の壁に背を預けた。

「それで、相談とは？」

椅子に座り直したイーシュはクリスに尋ねる。

「少し長い話になる。まずは俺とアンジェリカについてのことを知ってほしい」

クリスは自身とアンジェリカに何が合つたのか、“あの街”であつたことを出来るだけ簡潔に分かりやすくイーシュへ説明した。そして、

「ふむ……」

クリスがひとしきり話し終えた後、イーシュは顎に手を当てそれを反芻するように考える。

「嘘、ではないのだな？」

「嘘のようなホントさ。なんなら俺の心臓をナイフで刺してみろ。血が出て俺はもがき苦しむが絶対死にはしない」

それを聞きイーシュは勘弁してくれと言わんばかりに引きつった笑いを見せた。

「それで、お前は私になにを聞きたいんだ？」

「不死の治し方だ」

「馬鹿を言うな。私はエクソシストでもなければ、ゾンビを人間に戻す術など知りはない。専門外だよ」

「悪魔やウィルスじゃない。引き起こしたのはお前が信じる“神”だ」

そう言われるとイーシュは「大体だ」と反論を切り出す。

「我々人間の祖先は元々、知識の実を食し楽園から追い出された。それは人間が罪を犯したことへの罰でもあるが、楽園にある生命の実までも食されることを神が恐れたからだ。人はその二つの実を食すことによって神と同等の存在へと昇華する。では、お前とアンジェリカの場合はどうだ。全知全能の神と同等の存在になり得ているか？」

イーシュはそれについて甚だ疑問だと付け加えた。勿論、クリス自身もその自覚はない。恐らくアンジェリカにもだ。

「それにその“神”は、お前に新たな神として成り代わって欲しいと望んでいるわけだろう？　ならば生命の実をお前に食べさせた時点でお前がこの世界の神になっていないとおかしいのだ。何か他の意図があるようにしか思えんな」

確かに。何かがおかしい。クリスもそう思った。しかし、その“意図”というものがふりかかる試練と関係すると思えば。自分たちは神とあの天使に踊らされているのは間違いない。とにかく現時点ではクリスとアンジェリカは“神”では無いということだ。では、今のクリスとアンジェリカは何者なのか――。

「まあ、良い。私は私でその件を調べてみよう。主の潔白を証明するのも神父の務めだろう」

そう言ってイーシュは話を切り上げ、椅子から立ち上がった。

「これで貸し借りは無しだな」

歩き出したイーシュはクリスの肩を叩き、そのまま部屋から出て行った。

翌日、ヴェネチアは全域で雨模様だった。

司祭館で部屋で退屈そうにテレビのチャンネルをザッピングしているアンジェリカを尻



目に、クリスは教会の方へと向かった。

クリスが足を運んだのはイーシュの書斎だった。

「なにか進捗はあったか？」

クリスはイーシュに尋ねる。イーシュは書斎机に向かってなにやら書類を読んでいた。

「いいや。昨日の今日だ、そう簡単にはいかないさ」

そうか、とクリスは肩を落とす。

イーシュは立ち上がり、机の上に置いてあるコーヒーマグからコーヒーマグをカップに注ぎ、クリスに手渡す。クリスはお礼を言いちみちみとそれを飲む。

クリスはなんとなくイーシュに尋ねた。

「お前、最近なにやってるんだ？」

イーシュはその質問に苦虫を噛んだような困った顔をして答える。

「なについて、そりゃあ。見ての通り神父さ」

クリスは訝しみ、戯けるように話を続ける。

「まあ変なことに足をつ突っ込んでるんじゃないか？ “ユダ”さんよ」

イーシュは溜息をつき、もうあんなことはごめんだねと肩を竦めた。

「汚い金に手をつ突つ込むのはもう懲り懲りさ。妻にも逃げられた。子供にもだ。私のことを氣にかけてくれているのは私を消したい組織の人間か警察の犬どもだよ」

「まだ追われているのか？」

「いいや、おかげさまでな。奴らも流石にこんな辺境の島で私が神父をやっているとは思わないだろう。これもお前が私の逃亡を手助けしてくれたからだ。本当に感謝している。お前のタクシーがあそこに停まってなけりや今頃鉛球でケツの穴が二つは増えているだろうさ」

神父が言うようなセリフじゃないなとクリスは呆れながらも笑って見せる。

「神父になったのもあの頃の罪滅ぼしさ。そのためにこの教会を預かり従事している。そして、今は“神の子”が二人もいらつしやる。主が私に与えてくれた贖罪の機会なのかな」

そう真面目に語るイーシュは次第に我慢しきれなくなり腹を抱えて笑い出した。クリスも嘆息しながら肩を竦め、笑いあった。

「今日はヴェネチア本島に行く」

「……重いんだが」

そのまた翌日のことである。昨日とは打って変わって快晴な空が広がっていた。ムスツとした顔のアンジェリカがまだ寝ぼけまなこでベッドに転がっているクリスの上へとマウントをとっていた。暇を持て余しすぎたアンジェリカのご機嫌は爆発寸前のようなのである。

「今日は本島に行くの！」

「おう、上手いジョークだな……って痛い痛い！ 分かった、俺が悪かった！」

クリスはポカポカと自分の身体を叩くアンジェリカを必死に宥める。

「どうどう！ 落ち着けて！ 行くから！ 絶対行くから！」

「本当？ じゃあ、すぐに準備してね！ あたしも着替えてくる！」

そういうとアンジェリカはトコトコと走りだしクロゼットの前で着替えを始めた。

やれやれ、パパも大変だ。そうクリスは思った。

二人は身支度を整え、司祭館から出る。太陽の逆光が眩しくて目を眇める。こういう時にはなんとなく太陽が眩しかったからと言いたいところだ。

出かける途中の道でイーシュに出会った。

「ん？　こんな朝早くからどこへ行くんだ？」

「本島へ行くこうと思つてね。アンジェリカがうるさいんだ」

「今日行くのはあまりオススメは……しないが、まあ、行つて来い。めつたに見れるものでもないしな」

イーシュの意味深なその言葉にクリスは頭を捻る。何のことを言っているんだ、こいつは。

「行けばわかるさ。楽しんでこいよ」

そう言つてイーシュはクリスの肩を叩き教会へと歸つていった。

「さ、行くわよ！　クリス」

そんなイーシュの言葉はアンジェリカの耳には届いていないらしい。さつきから浮足立っているのが目に見えて分かる。こういうところは我が娘ながら可愛いと思う。

「おう、行くか！」

そう言つて二人は手を繋ぎ、水上バスの停留所へ向かった。

水上バスに乗っているとクリスはだんだんとその異変に気づいてきた。

昨日の雨。そして、イーシュの忠告。その二つでクリスはピンときた。

そして、本島へ着く頃――。

「クリス、なにあれ……」

「なにつて、そりゃあ」

知っている者ならすぐ分かる。ヴェネチアの名物と言っても過言ではないからだ。

そう、アクアアルタだ。このアドリア海、特にヴェネチアの近辺の潟は気象や気圧の影響で潮が満ちると異常に水位が上がる。そして、その結果ヴェネチア本島はその名の通り本当に“水の都”となってしまうのだ。

ヴェネチア本島に着いた二人はしばらく呆然としていた。

なんせ見るところ見るところほとんどが水浸しの大洪水だ。脚の三分の一は水に沈んでいる。幸いなのはあまり流れが強くないので歩けるということ。

「どうする？ アンジェリカ」

「どうするつて、そりゃあ……」

アンジェリカは靴を脱ぎだした。おいおいと、クリスは突っ込むがそんなことも関係せ

ずアンジェリカはスカートをたくし上げる。

「ほら、行くわよクリス！」

「ええ……」

渋々とクリスも靴を脱ぐ。ズボンの裾をロールアップし、ずんずんと進んでいくアンジェリカの後を追う。

「ほへー、サンマルコ広場も水たまりと化してんな」

水に沈む広場は陽の光を反射してとても幻想的だった。ある者は長靴で、ある者は裸足でその中を闊歩していた。

島の住民は流石に慣れたもので、この状況に動じず生活を営んでいる。ボートを持ち出しこの状況を楽しんでいる者たちもいる。この国の陽気な部分が見えクリスは微笑みでみせる。



そんな風景を見ていて感化されたのだろう。アンジェリカは楽しそうにぴよんぴよんとそこら中を走り回りだす。クリスは服が濡れるぞと注意を促すがアンジェリカは既に聞く耳を持っていない。走って、跳ねて、クルクルと回ってみせる。クリスにはそれが泉で遊ぶ小さな水の妖精のように見え、自然と頬が緩んだ。

「ねえ、クリスもこっちに来なさいよー！」

アンジェリカは広場の先からクリスの方へと叫ぶ。クリスは遠慮しとくと苦笑しながら首を振って断った、のだが。

トコトコトコ。ガバツ。

「え、アンジェリカ、っておい！」

有無も聞かずアンジェリカはクリスの元へ走ってきてその手を握り、そしてまた水の中を走りだす。

「ちよ、待て！ アンジェリカ！ ……うおっ？！」

そして、クリスは足をもつらせ派手に転ぶのであった。全身びしょ濡れになったクリスを見てアンジェリカは腹を抱えケラケラと笑う。



クリスはムツとなり、ころんだ状態からアンジェリカの腕を勢い良く引つ張った。はたして、アンジェリカも大きくバランスを崩し水の中へと顔から飛び込むことになる。

一瞬の間が生まれた。そして、二人の眼に火が灯る。

「おりや！ 食らいやがれ！」

「冷たッ！ ちよ、やったわねクリス！ 上等よ！」

二人は子供のように水を掛け合いながら水上を踊りまわる。それは無邪気でバカバカしくもあり、それでいて優しさに溢れるような一幕だった。

そんな二人を見ながら周りにいる人々は笑って声援を送ったのだった。

「それで？ 今日はスクールにでも遭ったのか？」

その日の夕方、教会に帰ってからイーシュに呆れながらも尋ねられた。

全身ずぶ濡れな二人は何も答えず、ただお互いに自分のせいではないと無言の主張をイーシュへ送る。

イーシュはこめかみに手を当て、溜息をついた。

「風呂に入れ。その後二人の言い分を聞こうか」

イーシュはそう言い残し、自分の書斎へと消えて行つた。

トルチェツロ島に来てから三日目が訪れた。

アンジェリカは昨日と同じく、またも本島へ繰りだそうと寝ているクリスを叩き起こす。クリスは眠そうな目をこすり、気だるげな身体を少し上げるとイーシュでも誘つて行つて来いと素つ気なく返事をした。

そんなことを言われるとアンジェリカもむくれ顔になる。

「もういい！」

それだけを言い残しアンジェリカは部屋から出て行つた。

アンジェリカは一人とぼとぼ歩きながら教会へと向かう。中に入ると設置してある長椅子に座り、ぼんやりと教会内を眺めた。アンジェリカにとっては宗教画のモザイクなどには興味がなく、すぐに飽きた。

なんともやきもきしていると、そこへ書斎部屋から出てくるイーシュと出くわした。

「やあ、おはよう。アンジェリカ」

「おはようございます。イーシュさん」

挨拶を交わしたイーシュはアンジェリカの横へと座った。

「どうしたんだい？ クリスとでも喧嘩したのかな？」

アンジェリカは首を横にふる。

「いいえ、そんなことは。ただ——ただ、クリスには家族サービスが足りないと思うの」

「それは、なんとも。私としても経験があるから頭が痛いな」

そう言いイーシュは苦笑いを漏らした。

「イーシュさんは、その……。私と本島へ行ってくれたりするかしら……？」

アンジェリカは恐る恐るイーシュに尋ねた。

イーシュは手を顎に当て少し考える振りをしたが、

「ああ、いいよ。今日は特に用事もないからね。付きあおうじゃないか」

イーシュがそう答えると、アンジェリカは満面の笑みを浮かべた。

「本当に？ イーシュさん、大好きよ！ すぐにでも行きましょ？」

「分かったよ。すぐに準備をしてくなさい。私も着替えてくるよ」

「うん！」

言うが早いか、アンジェリカはすぐに教会を飛び出していった。その姿を見てやれやれと言わんばかりにイーシュは溜息をした。

「このカフェローリアンはね、ヴィネチアにあるカフェの中で最も歴史のあるカフェなんだ。カフェラテの発祥の店だとも言われているね」

二人は本島へ入りまず朝食を摂ることにした。そして、今いるのがサンマルコ広場のカフェローリアンだ。

「コーヒーのことはよく分からないのだけでも。苦くて私は飲めないもの。でも、カフェラテとカフェオレってなにか違うの？」

そう言いながらアンジェリカはサンドイッチを頬張る。イーシュはその質問に答える。

「カフェラテは豆を高抽出したコーヒー、エスプレッソのことだね、それをミルクと混ぜたものさ。カフェラテはただのコーヒーとミルクを混ぜたもの。砂糖を入れたカフェオレならアンジェリカにでも飲めるんじゃないかな」

へー、とアンジェリカは感嘆の声を漏らす。

「イーシュさんって物知りなのね」

「まあ、神父だからね」

アンジェリカはどこかで聞いたようなセリフだと思った。どちらもあまり説得力がないが、まあそういうことにしておこうと思った。

「食べ終わったらどこへ行こうか？　と言つてもここは観光向きではあるが、娯楽は少なくてね」

「いえ、あたしは見てるだけで楽しいの。この街を歩いているだけで充分な娯楽だわ」

「そうか。なら、嫌って言いたくなるほどの街を案内しよう」

「あら、いいの？　あたし、きつと死ぬまで嫌って言わないわよ？」

「それは……困るな」

そう言い、イーシュとアンジェリカはお互いに笑いあった。

それから少しの間、二人は談笑をしあい食事を終え店から出た。

イーシュはアンジェリカにヴェネチア中を案内する。サンマルコ広場から始まり、ドゥカレ宮殿、サンマルコ寺院と進み、鐘楼へ登ると二人は街を一望した。それからため息橋（イーシュから名前に由来を聞いたアンジェリカはなんとも複雑な顔をした）を鑑賞し、

カナルグランデ運河を見渡しながらリヴァ・デツリ・スキアヴォーニ通りを抜けた。カステッロ方面へ細い道々を歩く。最終的に辿り着いたのはマルタ騎士団の館にある庭園であった。

イーシュは途中でアンジェリカにジェラートを買い与え、庭園のベンチに座り二人は休憩をした。

「ありがたい、イーシュさん。とても楽しいわ。この街は迷路みたいね。ヘンゼルとグレートルみたいパンクズを置いて行かないときつと元の場所には戻れないわ」

「ふむ、それは困ったな。それじゃ私たちは一生ここで迷い続けることになる」

「神父様は迷い子を導くのではなくって？」

「神父だって道を全て知っているわけではないし迷子になることだってあるさ」

そう言つてイーシュは力なく笑つてみせた。しかし、「でもね」と言葉を付け加える。

「知らなくても、迷つても、信じる道を見つければいいのさ。それがどこに繋がっているか分からなくてもね。きつとどこかには辿り着くよ」

それを聞きアンジェリカは一瞬間を曇らせた。どうしたのか、とイーシュは尋ねる。

「あたしね、最近クリスのことをあまり信じられてないかもしれない。不安になるの。ど

うしてもね」

ふむ、とイーシュは顎に手を当て考えてみる。アンジェリカの言わんとすることは理解できた。そして、その答えもイーシュは持ち合わせていた。

「それはきつと君の杞憂に過ぎないよ。クリスは君のことを愛している」

「でも、それは——」

アンジェリカは話を切り返そうとして言い淀む。どこか泣きそうな顔をしていた。それを見てイーシュは自分の理解出来ない何かがあるのと分かった。何かフォローを入れよう考える。しかし、アンジェリカはすぐに笑顔に戻った。

「そうね。私もクリスのことを愛しているもの。なにも心配することはないわ」

「そうさ。君たちは愛で繋がっている。良い親子だよ」

そこでアンジェリカはシニカルに歯を見せ笑いながら言う。

「でも、クリスはこんな美味しいジェラートは買ってくれないの。きつと買い渋るわ。そこは不満ね」

「フハハ、それはそうかも知れない。帰ったら私からも言うておこう」

イーシュもそう言い笑ってみせた。

「さあ、そろそろ帰ろうか。クリスに説教しないといけないしな」

「ええ、そうね。あたしも加勢しちゃうわ。そしたらここへ三人でまた来ましょう？　みんなでジェラートを食べるの」

ああ、そうだなとイーシュはアンジェリカの頭を撫でる。アンジェリカはくすぐったそうに照れてみせた。

二人が司祭館へ買える頃には夕方になり陽も地平線の向こうで沈みかけていた。

アンジェリカがイーシュより先に司祭館へ入るとあることに気づく。匂いがするのだ。それも美味しそうな、でも少し焦げ臭い、肉が焼ける匂い。

アンジェリカは匂いがする方向を探る。キッチンの方からだ。アンジェリカはキッチンへと向かう。

そこに居たのはエプロン姿のクリスだった。

「よう、帰ったか。手洗ってこいよ。今日はご馳走だぜ」

「どうしたのよ、急に・・・」

アンジェリカはクリスが料理をするところを初めて見た。それに驚く。見ればクリス自



身も料理の腕を隠していたわけでもなさそうだ。色んな食材がぎっくばらんに転がり、頬はすす汚れていた。

「慣れないものをするもんじゃないな」

そう言ってクリスは苦笑いをした。そこにイーシュもキッチンへ入ってきた。

「準備は大変そうだな。そして、掃除もな」

イーシュは肩を竦めて笑ってみせる。きょんとしたアンジェリカは二人に聞く。

「今日は何かお祝い事でもあったかしら……？」

そのセリフを待ってましたと言わんばかりにイーシュは目でクリスに合図を送る。それに対してクリスはコホンと咳払いをした。

「えーっと、その、なんだ。今日は……お前の生誕祭だ」

「生、誕祭……？」

クリスは少し間を開け、深呼吸をし、それから少し恥ずかしそうに頬を掻きながら話を続けた。

「本当のところの誕生日は分かりやしねえ。少なくとも俺は知らない。だから、今日この日をアンジェリカ、お前の生誕を祝う日と決めた。それで、イーシュと昨日相談しあつて

計画してたんだ。元々イーシュが歓迎会をやるうってことだったんだがな。それならばって、思いついたんだ。喜べ、パパ特製ケーキも用意してるぞ」

どう言えばいいか分からない。アンジェリカは戸惑う。そして、言葉より先に出てきたのは目からこぼれ落ちる涙の方だった。

「おいおい！ な、なんで泣くんだよ！！ い、嫌だったか？ それともちゃんと誕生日あ

んのか！？」

慌てふためくクリスは誰がどう見ても滑稽だった。しかし、アンジェリカは静かに首を振る。

「うれ、しくてっ……えぐ……えへへ。涙が出ちゃった。ありがとう、クリス……ううう！！」

一度は笑顔を取り戻そうとしたアンジェリカだったが、堪えきれずくしゃくしゃな顔をクリスへ押し付け抱きついた。そんなアンジェリカの頭をクリスは優しく撫でてやる。クリスにはこの娘が愛おしくて堪らなかった。

「な、心配することは無かっただろう？」

イーシュはアンジェリカに語りかける。

「うん……うんっ！」

アンジェリカはくしやくしやな顔で笑ってみせた。クリスには何のことだか分かりもしなかったが、アンジェリカが笑顔になってくれたのだから何でもいいと考えるのをやめた。

「じゃ、ちようど出来たところだし、冷めないうちに食べちまおうぜ。盛大にパーティーだ」

そうしたやり取りの後、三人は食卓テーブルにつく。

テーブルの上には少し焦げたターキー、手でちぎったであろうぶ格好なサラダ、それにクリームがドロドロに溶けかけているケーキが。他にも様々な料理が並べられていた。どれも味はいまいちでとても褒められたものではないが、アンジェリカは今まで食べたどんな料理よりも暖かく美味しいと感じた。

あらかた食べ終わった後、クリスは小さな箱を取り出す。なんとプレゼントまで用意していたらしい。

「わあ！ なになに！ 何かしら！」

アンジェリカは喜々としてその小箱を開ける。すると中から出てきたものは、  
「香水だわ！」

そう気づくとアンジェリカは嬉しそうに香水を振り撒く。

「良い匂い……クリス、ありがとっ！」

「おう、これでお前も少しは大人に近づけたな？」

その瞬間アンジェリカはムツとした顔をする。

「失礼ね、もう立派なレディよ？」

そして、無い胸を突き出しふんぞり返って見せた。クリスはやれやれと溜息をつくのだ  
った。

こうして、夜は更けていった。クリスたちのサプライズパーティーは大成功で幕を閉じ  
たのだ。

——閉じたのだっただが……。

その夜のことである。クリスは先に寝室のベッドの上で眠り込んでいた。そのあと、ア

ンジェリカがベッドに潜り込んできたのだ。クリスは微睡眠の中で今日は嫌に甘えたがりだなど思った。

しかし、状況をすぐに察するとクリスの頭は急速に覚醒した。アンジェリカの顔はほんのり赤みをおび、トロリとした眼は間違いない酒に酔っていた。

そして、クリスはアンジェリカの着崩れた寝間着のキャミソールを見て息を呑む。

そこでアンジェリカが口を開くのだった。

「クリス、あたし貴方と繋がりたい」

クリスは呆気にとられて言葉も出ない。しかし、そんなクリスにもう一発痛恨のストレートが突き刺さる。

「貴方の、子供が欲しいの」

クリスは咄嗟に咳込んだ。いよいよ頭の中は混乱のラッシュでパンク寸前だ。

そんなクリスを差し置き、アンジェリカはクリスの身体の上へと乗りかかり、そのまま首筋にキスをした。そしてクリスの服を脱がし、首筋に突き立てていた唇から舌を出して舐めずり回すかのようにその舌を下腹部まで這わせていく。

「んはぁ……ちゅる……んっ……」

アンジェリカから甘い吐息が漏れる。クリスは不覚にもその行為に反応してしまう。

そのままアンジェリカはクリスのズボンを下ろし、ペニスを口にふくもうとした。

そこでクリスはハッと我に帰り、アンジェリカを押しつけた。アンジェリカは吹き飛ばされ、そのままひっくり返るかのようにベッドへ横たわった。

クリスは怒号とも言い訳ともとれるような声色でアンジェリカを叱責する。

「俺達は……俺達は家族だろ!! 家族はこんなことをしない!!」

しかし、起き上がったアンジェリカもヒステリックに叫ぶ。

「あたしの“お父さん”とはこういうことしてたもん! それが普通じゃないの!? 分か

らない、分らないよお……」

そして、アンジェリカは泣きじゃくる。

「だって、あたしクリスのこと好きだもん……。クリスと結婚して子供だって欲しいもん

……ッ!!」

そんな風に言われるといよいよクリスは弱ったような顔を見せ、アンジェリカを抱きしめながら宥める。

「大きな声を出して悪かった。でも、“本当の家族”はこんなことしないんだ。俺は家族としてアンジェリカを愛している。それじゃダメか？」

アンジェリカは「そんなの……そんなのダメよ……それじゃあ、あたしは……」と文句を言いながら段々と声を小さくしていく。そして、そのままクリスの腕の中で眠った。クリスはしばらくそのままの体勢を維持し、嘆息した。

——明日、イーシュには言ってやりたいことだらけだ。  
クリスはまた溜息をついた。

それから二週間ほど時が経つ。

クリスとアンジェリカは相変わらず良いようにしている。喧嘩をしたかと思えば、数分後にはテレビを見ながら二人で腹を抱えて笑っている。イーシュにはこの親子がとて羨ましくも、愛くるしく見えた。

そんな折だ。イーシュに一本の電話が飛び込んでくる。

「もしもし？ どなたかな？」



「やあやあ、イーシュ君。私だよ。景気の方はどうだね？」

イーシュはこの下卑た中年男の声を知っている。イーシュは眉に皺を寄せながら挨拶をした。

「これは、これは。まあ、ボチボチやっていますよ。困るということはない程度には（ルビ）」

「それでは困るなあ、イーシュ君。良い情報が入ってね。私は君に仕事を頼みたいのだよ。なあに、金はとんと弾むさ」

イーシュは溜息をつく。どうにもこの男の声は生理的に受け付けない。

「……それで？　仕事というのは？」

「簡単な話だよ。“掃除”をして欲しくてね」

「……分かりました。詳細をどうぞ」

男とイーシュの話は淡々と進んでいく。数分後に電話は切れた。

「簡単な仕事、ね」

イーシュはそう小さくつぶやき、自分の書斎へと向かった。

翌日、イーシュはクリスを神妙な顔で書斎へ呼び出す。クリスは何事かと尋ねた。

「お前にとって重要な話だ。昨日電話が私に一本かかってきてな。端的にいうと、サラが生きている」

「な、なん……だつてッ!? 本当かッ!?」

「ああ、本当だ。私はお前らの不死の力について調べていた。頼まれていたからな。それで、教会関係各所に連絡をとっていた。すると思わぬ話が飛び込んできた。サラが修道院で生活していると。お前とアンジェリカの名前をだして調べていたのが幸をなしたんだ。本来の案件とは違うが、お前に伝えておかないとは思つてな」

クリスは頭のなかが真っ白になっていた。サラが、生きている。死んだと思つていた。また、会えるのか……?

「そして、彼女から伝言を預かっている」

「教えてくれッ!! サラはなんて!」

「彼女も君に会いたがっている。だから、二日後。このヴェネチアで開催されるカーニヴ

アルで再会しようと。そう言っていた。ため息橋で待っていると」

クリスは崩れ落ちるかのようにイーシュに抱きつき、感謝の言葉を伝えた。勿論イーシュが言うように求めいた情報とは違うが、こちらのほうが何倍もクリスにとって嬉しかった。

「そうだ！ アンジェリカにも伝えないと！」

そう言つて部屋を飛び出そうとするクリスをイーシュは急いで呼び止めた。

「いや、待ってくれ。アンジェリカにはまだ内緒にしておいてくれ」

「どうして？」

「彼女の要望だ。まずはお前と二人きりで会いたいそうだ。女心、というものではないかな？」

「それは……」

クリスは酷く当惑した。しかし、最終的にはイーシュの言い分に納得した。こうしてクリスは二日後のカーニバルを待つことになる。

カーニバル当日。クリスはアンジェリカに今日という日がどういう日なのかを説明する。その話を聞いたアンジェリカは素直に喜び、そして納得してくれた。

「いってらっしゃい、クリス！ きつとママも二人きりになりたいのよ」

アンジェリカはそういう微笑んで見せる。その顔を見てクリスもいよいよ決心が固まる。約束の場所へ行く前にアンジェリカをしつかりと抱擁した。

「ママに会ってくるよ。そして、すぐここに連れてくる」

「ええ、だから伝えて欲しいの。貴方の娘も待っている」と

それから二人は微笑みながらそばを離れた。

「しばらくの間はイーシュとお留守番だ。いい子にしてるんだぞ」

「言わなかったかしら？ あたしは立派なレディよ？ ちゃんと待ってるわ」

アンジェリカのその言葉にクリスはいつも通り肩を竦め嘆息をひとつ。そして、笑ってみせた。

「じゃ、いってくるよ」

そう言ってクリスは司祭館から出て行った。カーニバルが開催されている本島へ、一人

で向かうのであった。

夕方の十八時頃を回ろうかというのに街は大きく賑わっていた。その勢いは増すばかりでいよいよ辟易としている。しかし、こんなところでへこたれてはいられない。約束の間は刻々と近づいている。

鐘楼の音が街中に響き渡る。十八時の合図だ。クリスは動き出す。

サンマルコ広場からため息橋へと向かう。遠目からでも発見できないものかと目を見張る。

そして、発見したのは。クリスの見知った天使の姿だった。

「人間とは実に愚かなものだ。何度も同じ過ちを繰り返す。そうだろうか？」

クリスは膝から崩れ落ちる。顔面は蒼白となり、胃液が逆流するのが分かった。

「貴様の過ちは二つだ。一つは私の言葉を信じなかったこと。サラという女は死んだ。これは揺るぎない事実である。そして、もう一つ」

一瞬間を開け、天使はシニカルに笑ってみせた。

「貴様はなぜまたあの娘を独りにした？」

クリスはハツとなる。目の前が暗転して行くのが分かる。その双眸から涙が溢れる。

「クソ。クソ。クソッ！」

クリスは慟哭の叫びを上げる。周りの観光客が不審がり距離を置く。クリスの周りはポツカリと穴が空いてしまった。クリスは独りだ。

その姿を冷めた目で見つめる天使はそうまたシニカルな笑みを浮かべその場から光となり消えていった。

クリスはそれを見てから、立ち上がる。まだ間に合うはずだ。そう信じて、走りだす。

アンジェリカは教会の中にいた。恐らく、まだいるのだ。（ルビ）

覚えていることはイーシュに教会の書斎へと呼ばれたこと。書斎の本を眺めていると突然後頭部に激しい痛みが走ったこと。それからのことは覚えていない。

そして、今。アンジェリカは手足を縛られ目隠しで視界を奪われている。分かることは、どこかも知れないコンクリートの地面の上で座らされているということ。

不意に声が聞こえる。

「赦してくれ。これも仕事のうちなんだ」

とても冷淡な声だった。アンジェリカはそれがイーシュの声だと気づくのに少し時間がかかった。

アンジェリカの目隠しが外される。その瞬間アンジェリカは口早に叫ぶ。

「一体どういうつもりなの？　ここはどこ……？」

「ここは教会の地下室。どういうつもりなのか、と問われると。依頼が入った、それだけさ」

アンジェリカはイーシュを睨みつけ啖呵を切るように言う。

「きつとクリスが助けに来てくれるわ」

イーシュはそれに淡々と答えた。

「あいつは今もこの世にいない女を探し続けているに違いない」

「あなた……嘘をついたの……？」

アンジェリカの顔はどんどん青ざめていく。驚愕の色が隠せない。

その瞬間。カチャリとドアの開く音がする。アンジェリカはその時笑顔になったが、そ

れは数秒のことだった。

そう、クリスではない。数人の男たちが部屋に入ってきたのだ。

アンジェリカは身体を強張らせる。この男たちのニヤニヤと笑う顔に見覚えがあるからだ。あの顔は“父親”がよくしていた。

アンジェリカは縛られた身体を懸命に動かし逃げようとその場で暴れまわる。しかし、転げるだけでアンジェリカの拘束が解けることはなかった。

そして、イーシュが突然アンジェリカの口を無理矢理こじ開けた。アンジェリカは咄嗟のことに驚く。だが、イーシュそんなことに構うこともなく小さな粒を数個、それと酒をアンジェリカの口の中に流し込んだ。アンジェリカはむせ返り、咳き込む。しかし、その勢いで何かの粒を飲み込んでしまった。

その瞬間、世界がぐるぐると回り出す。身体の緊張がほぐれていくのが分かる。力が入らない。何かもが。溶けていくような。全てが優しく包み込んでくれるような。そんな感覚に襲われる。

“どこまで好きにしている？”

そんな声が聞こえた。



「指定は無かった。どこまで好きにすればいいさ」

イーシュはその声にそう答える。

何を言っているのだろうか。よく分からない。アンジェリカはとうにクスリで意識が朦朧としていた。判断能力などすでないものとして等しい。

それを確認したイーシュはアンジェリカの拘束を外す。

チャンスだと思った本能で悟った。アンジェリカは立ち上がり逃げ出そうとする。だが、足が思うように動かない。絡ませたその足で躓き、地面へと重く倒れこんだ。

倒れこんだ先に、なにかじゅうじゅうと灼けるような音がする。

「なに……それ……」

アンジェリカは思わず尋ねた。それに一人の男が下卑た笑いを洩らしながら答える。

「焼きごてさ。ちゃんとこれで止血しねえとなあ？ 頼むからそうそうに死んでくれるなよ」

アンジェリカにはなんのことなのか皆目見当がつかなかった。しかし、大丈夫だ。私は死になんかしない。だって、不死身なのだから。

その男は自前のカバンからガサゴソと何かを取り出す。すると一瞬煌めく閃光が見えた。

よく研がれた肉切り包丁だ。

そして、男はアンジェリカの身体の上へ馬乗りになる。アンジェリカは抵抗しようとする力が出ない。

アンジェリカは弱々しく声を洩らした。

「何をするの……？」

男はニヤついた顔で答える。

「最高のショーさ。主役はお嬢ちゃん。そして俺達は観客だ。いい声で歌っておくれよ？俺達が最高に満足するようにな」

そう言つて男はアンジェリカの肩から上腕部の当たりを肉切り包丁で切り始めた。

「あつ……アアッ！！ ああああッ！！ アッ、あ、あああああああ！！！」

ギコギコ。その音が響くたび、アンジェリカは悲痛の声を上げた。

吹き出す血を被りながらもなお笑顔を崩さぬ男から狂気があふれだす。

そうして、アンジェリカの腕がひとつ取り外される。男は取り外した腕を恍惚の顔で眺め、そして文字通り舌で味わうかのように舐めまわした。

止めどなく流れる血。薄れ行く意識。でも大丈夫。私は死なない。私は死なないのだ。きつとクリスが助けに来てくれる。アンジェリカは心の中で唱え続けた。

そこへ傷口に焼きごてが押し当てられる。アンジェリカは絶叫した。

周りの男たちは笑いをこぼす。イーシュはそれをただ冷たい目で見つめていた。

「さて、お嬢ちゃん。次は反対側の腕だ。俺たちをもっと楽しませてくれよ、なあ！」

アンジェリカは恐怖に震えた。胃液が逆流し始める。そして、もう片方の腕に肉切り包丁が刺し込まれた時、アンジェリカは嘔吐した。

アンジェリカは小さな声で唱える。大丈夫、私は死なない。私は死なない。クリスがきつと助けに来てくれる。私は死なないんだ。

そうこうしているうちにその片腕も無残に切り取られた。そして、止血のための焼きごて。アンジェリカは慟哭の悲鳴を上げる。いつそのこと死にたいと思う。しかし、死にはしない。死ねはしない。

「お嬢ちゃん、よく頑張るな〜！　ここまで意識を保ってる奴なんてそうはいないぜ。だから俺達はいつも興醒めしちまう。だが、今日は違うようだ。もっと楽しませてくれよ、お嬢ちゃん」

そして、男は手際よく、鼻歌交じりに、アンジェリカの両脚も切り落としていく。アンジェリカは痛みが走るたびに嘔吐した。涙が止まらない。胃液は尚も逆流し続け五臓六腑までも吐き出しそうになる。

痛い。痛い。私は死なない。私は死なない。私は死なない。私は死なない。

アンジェリカはもはや呪詛のように言葉を繰り返す。錯乱した精神は崩壊寸前だった。しかし、追い打ちをかけるように別の男がアンジェリカの傍へ歩み出る。

「綺麗な身体になったねえ。さあ、あとは犯しに犯し尽くしてあげよう。そして、最後にはその首を落とすんだ。それでこのショーは幕を閉じる。君もやっと死ねるんだよ。嬉しいかな？」

「私は……私は死なないッ!!」

アンジェリカは狂乱するかのよう泣き叫ぶ。男たちはそれを聞いてせせら笑う。

傍から見ているイーシュはこの儀式になんら意味は無いと心の底から呆れていた。この娘をさっさとアドリア海にでも沈めたほうがいいとも思っていた。飽くまでも仕事だ。早く終わらせたいと願うばかりだった。

そうして、イーシュがあくびを噛みしめようとした時。地下室の扉が強引に蹴破られた。その場にいる全員が突然のことに驚く。現れたのはクリスだった。

「クリス、どうしてお前ここが!？」

一番驚いていたのはイーシュだ。この地下室の存在をクリスを知るわけもない。一体どうして。

「香水の匂いだよ、イーシュ」

ドスの効いたクリスの声。そして、イーシュはハツとなる。確かにアンジェリカからは微かに香水の匂いがしていた。クリスがアンジェリカにプレゼントしたものではない。

「クソッ!」

イーシュは懷から隠し持っていた銃を取り出そうとした。しかし、動作がクリスよりはるかに遅かった。気づけばイーシュはクリスに殴り飛ばされていた。他の男たちも同様だ。クリスに容赦はない。

その場が静かになるのにそう時間はかからなかった。その場に立っているのはクリスだ

けだ。あとの者はみな地面に転がっている。

そして、クリスは変わり果てたアンジェリカの姿と対面する。膝から崩れ落ちた。無残な姿になったアンジェリカを抱き上げ、涙を溢しなら謝りつづける。

「ごめんな……ごめんな……ッ！ 俺が、一緒にいれば……！」

アンジェリカは弱々しく笑みを見せる。

「ほら、来てくれた……」

それからアンジェリカは意識を失った。

クリスはゆつくりと抱きかかえたアンジェリカを地面へ預け、倒れているイーシュの元へ歩み寄る。そして、胸ぐらを掴んだ。

「お前、一体なんのつもりだ」

「仕事の依頼だよ。その子を処分しろとな」

「足を洗ったんじゃないのか!？」

クリスは激昂した。イーシュはなにも答えない。そんなイーシュの顔をクリスは怒りに任せてぶん殴った。そして、そのままイーシュの身体を床へ投げ捨てる。こんな奴の相手

をしている場合ではない。アンジェリカの身を案じなければ。

「おい、アンジェリカ！ アンジェリカ！ 返事をしろ、アンジェリカ！」

アンジェリカからの返答はない。クリスは恐る恐るアンジェリカの心臓へと耳を押し当てる。トクン、トクンと小さな鼓動が聞こえた。クリスは安堵の溜息を洩らす。

クリスはアンジェリカを抱きかかえ、歩き出す。地下室から出ようとドアに手を伸ばした。

その時、イーシュがうわ言のように話し始める。

「罪は、滅ぶことがないんだ……。赦されることはない。贖罪を重ねて拭ったところで、足は汚れたままさ。そう気づいた時、自分は罪人として一生を過ごさなければならぬと悟った。裁かれることに怯え、いつか来るであろう裁きをただじっと待つ。それがやつと私にやって来た。唯一の救いだよ。その子には悪いことをしたと思ってる。だから、お願いだクリス。俺を、このユダを——」

クリスは黙ってイーシュの言葉を反芻する。しかし、クリスは再度地下室のドアへと手を伸ばした。

そして、最後にこう言い残す。

「お前に何があったかは知らない。だから同情もしないし、裁いてもやれない。それは神の仕事であって、俺は神じゃない」  
「……………」

クリスが地下室から出て聖堂へと登るころ、一発の銃声の音が聞こえた。



それから、半年ばかりの時間が流れる。

クリスはイタリアの郊外に部屋を借り、アンジェリカと共に暮らしていた。

あの時からアンジェリカの身体は回復してはいない。その四肢には包帯が巻かれ、車椅子生活を余儀なくされていた。そして、口を開くこともない。身体は死なずとも、心は死ぬのだ。クリスはそう思う。虚ろな目をしたアンジェリカを見るたびに自身の心も傷ついていく。それでもクリスは一縷の希望を胸に、我慢強く耐えた。

アンジェリカの世話は言うなれば介護に近かった。食事もトイレも一人ではままならないう状態だからだ。食事は消化に良い物をスプーンに乗せ無理矢理飲み込ませる。トイレはオムツを履かせ、毎日必ず身体を拭いてやった。

クリスはふと思う。この子が赤子の頃に自分は傍にいなかった。サラが面倒を見ていたのだろうか。ならば今度は自分の番だろう。この子の父親は自分なのだ。愛する娘のために。そう思うと心が軽くなった。

クリスは窓から外を見やる。夏が過ぎ、秋の風が木枯らしを揺らしていた。

「アンジェリカ、少し外を散歩しようか」

クリスはアンジェリカへ優しく問いかける。返事はない。あるはずもない。

クリスはアンジェリカが乗る車椅子を静かに押し始めた。部屋を出る前に毛布を掛けてやった。それから出かける。

クリスたちの住居の近くには閑散とした並木道があった。そこを散歩する。紅葉が綺麗に彩っていた。

クリスはアンジェリカが暇にならないよう時たま話しかける。

「思っていたほど今日は寒くないな」

「日本では小春日和って言うらしいぜ」

「でも、きつと夜は冷えるだろうな」

「今日は煮込んだシチューでも作ろうか」

「ナオミから作り方を教えてもらっておけばよかったな」

「懐かしいだろ？ 何してるんだろうな、あいつら」

アンジェリカが返事をすることはない。それでもクリスは話しかける。聞こえているん

だ。きっとそうに違いない。ホントは笑いを堪えて我慢しているのだろう。この娘はそんな子だ。想像してクリスは微かな笑みを洩らす。

——そんな時、空から一枚の白い羽がクリスの頬を撫でた。

クリスその羽根に導かれるように歩く。辿り着いたのはひとつの教会だった。

教会には人氣がなく、寂れた様子だった。教壇の奥に施された大きなステンドグラスが仄かな光を洩らしながら埃の粒を反射させる。そして、そこには人のような影がある。その見知った影と対峙し、クリスは口を開く。

「よう。なんとなくここにいるような気がしたよ」

天使も口を開く。

「主は貴様たちをお見捨てになった」

クリスはその言葉になにも動じなかった。

「そうか。……それで？ 俺たちはどうなるんだ」

「ここで私自らが貴様たちを屠る。貴様たちは様々な罪を背負っている。ここで裁かなくてはならぬのだ」

クリスは力なく笑ってみせた。

「どうやって？ 俺たちは不死身なんじゃなかったのか？」

天使も冷淡に笑ってみせる。

「なにを勘違いしている？ 元来、貴様たちの祖先は知識の実を食し叡智を得た。しかし、それは全能であつたか？ 違ふだろう。なぜならば貴様たちの言うアダムとイヴは二人で実をわけあつたからだ。だからこそ半端な知能しか貴様たちには備わっていない。

そして、貴様の場合。“あの時”に生命の実を全て食したか？ 否、そうではないはずだ。そんなこと我々が許すはずもない。その結果がそこにいる娘だ。本来ならその子は完全に戻復している。お前も、分け与えた血も、半端なモノにしか過ぎない」

「なるほどな、そういうことか。そして、散々人をおもちやにして壊れたら捨てるのか？ 神つてのは身勝手なもんだな」

その言葉に天使は激昂する。

「主を人間風情が愚弄するか！！ 私には主が貴様を選んだ理由が毛頭理解できぬッ！ 貴

様は、貴様はここで屠らなければ私の気が済まない！！」

天使の手が光り輝きます。その光の中から一本の槍が顕現した。

「貴様もロンギヌスの槍くらい聞いたことがあるだろう。神の血が交わることで完成された聖遺物だ。この槍は万物の生命を摘み取る。神でさえこの槍で屠ることが出来る。しかし、神は信仰で守られている。概念は死ぬことはない。だから、かの神は復活を遂げたのだ。

しかし、貴様はどうだ。他に信仰されているか？ 他に愛されているか？ 他に敬われているか？ そうだ、貴様は概念も残らずここで朽ちることになる。ここで無に還るのだ」

クリスはこのことにも動じることは無かった。

「それは、お前たちの用意した“救い”なのか？ それならば、俺は甘んじて受け入れるよ。俺はここで終わってもいいと思っている。ただ——ただ、アンジェリカだけには。違う“救い”を与えてやってくれないか。この子にはこの世界をもっと見ていて欲しいんだ。いいことだってある、それを知ってほしい。俺はこの子を愛している。幸せになつて欲しいんだ。だから、頼む」

天使は一瞬逡巡する。だが、すぐにそれへ答えた。

「フン、なにが幸せだ。貴様がこの娘を不幸に陥れたようなものなのによくそんなことが

言える。この娘とて定命の者の理からは既に外れている。幸福の後には必ず不幸が付き纏うだろう。だが、しかし。いいだろう。この娘は放っておいてやる。貴様だけが消えれば、それでいい」

天使が槍を構える。クリスはこれが最後だとアンジェリカに優しく声をかけた。

「いつまでも愛している。それと、ごめん」

クリスは言い残すとゆっくりアンジェリカの目の前へと立った。最後くらい、この子を全力で胸を張って守ってやろうじゃないか。それがクリスの思いだった。

両腕を大きく開き、クリスは天使と対峙する。

そして、クリスはふと思い出したかのように口を開いた。

「……お前、俺のことが嫌いだろ？」

天使は眉を顰めそれに答えた。

「——ああ、大嫌いだ」

その言葉と同時に槍はクリスの身体を目掛けて投擲される。クリスはそれを受け入れるよう静かに目を閉じた。

はたして、クリスの身体は大きな衝撃と共にふわりと宙を舞う。それから重い音を立て

身体は地面へと落ちた。

痛みはそれほど感じない。そこに違和感を感じたクリスはゆっくりと目を開ける。

「アン、ジェリカ……！ お前、どうしてッ！！ 意識が戻ったのか……？」

クリスを庇うように負ぶさり槍を身体に受け血を流すアンジェリカの姿がそこにはあった。そして、そのままクリスの腕の中へと崩れ落ちていく。

車椅子から無理矢理飛び出したのだろう。その車椅子は勢いで地面に投げ捨てられ、車輪が虚しく空転していた。

「貴方が、クリスが……おかしいと言うからよ……」

そう言うアンジェリカは大きく咳き込み吐血した。クリスの腕が真っ赤に染まる。

「おい！ 死ぬなッ！！ 大丈夫だ！！ お前は死なないんだ！！ まだ、まだこの先を生きて

……ッ！！ 幸せになるんだ！！ 世界の果てを見に行きたいんじゃないのか……？」

「バカね……世界の果てなんて……、いえ、そうね。私は……見つけたわ。ここが世界の

果てなんだわ。最後にクリスと一緒に見られて良かった……。私の夢は叶ったの。だから……」

「おい！　しっかりしろッ！　目を開けるんだ！　お願いだから……ッ！」

クリスの頬へ涙が伝う。その一粒一粒が雫となってアンジェリカの顔を撫でる。

「ねえ、……お願いを、聞いてくれる……？　一生に一度の……お願いよ」

「そんなこと言うな！　そんなこと言うなよ……ッ！　お前のお願いなら何度でも聞いてやる！　いくつでも聞いてやるから！！」

「ううん、ひとつでいいの。ひとつだけ。ねえ、聞いてくれる……？」

クリスは嗚咽をこらえながら首を横に振る。その願いだけは受け入れてはいけないと、分かっているから。

「あたしね、クリスのことが大好きよ。大好きなの……。恥ずかしいけれど、とつてもね。愛しているの。だから、最後にお願いを聞いて？」



そして、アンジェリカはニコリと微笑んだ。

「私を一人の人間として、女として愛してください。それが私の最後の願いです」



そう言い残すとアンジェリカの身体からスーツと力が抜けていった。

「おい、おい……アンジェリカ？ 返事をしてくれ、アンジェリカ！ アンジェリカッ！」

アンジェリカから言葉が返ってくることはもう無かった。

「アンジェリカ……愛している。家族として、人間として、一人の女として。お前のことを愛している。これが証拠だよ」

そう言つてクリスはアンジェリカの身体を自分の方へと寄せ、唇と唇を重ねた。長く長くその温かみを忘れぬよう、深く唇を寄せた。

その後、クリスはゆっくりとアンジェリカの身体を地面に預けた。そして、アンジェリカに刺さった槍を抜き取り立ち上がった。

「よう、天使。待たせたな」

「……それをどうするつもりだ」

クリスはその手にある槍を強く握りしめる。

「聞いてばかりだったから俺も答えてやるよ。そうだな、俺もお前のことが……大嫌いだ」  
瞬間、クリスは握りしめた槍を勢い良く天使へ投擲した。天使が避けようとするも、行

動が遅かった。槍は天使の心臓へと突き刺さる。

そこから漏れるのは血ではなく、止めどない大量の光の粒だった。その光の中で天使はもがき苦しむ。

「貴様……ッ!! 貴様アああああああああああああ!! 人間風情にこの私が、こ

の私がああああああああああああああああ!!」

光は次第に大きさを増し、天使の身体を崩壊させていく。そして、最後には一縷の光の粒となり、潰えた。

カラン、と音を立て槍だけがその場に転がる。そして、静寂とクリスだけが虚しく教会に残った。

全てが終わったのだ。

クリスはアンジェリカの遺体を抱き、教会から歩き出た。

クリスはタクシーの運転手をしていた。ボロボロのビートルに乗り、日銭を稼ぐ。

クリスは運転席からサイドミラーを覗き込み、自分を観察してみる。

いつものようによれた白いシャツを着てシケモクの煙草を咥え、“白くなった”長い髪を首の後ろで結った男が鏡に映っている。まるで生気が感じられないな。クリス自身そう思った。

今日も客足は重い。暇に暇を重ねている。口に咥えたシケモクもフィルターに差し掛かり、異臭を発していた。それを車の灰皿に押し付け、溜息をつく。

それから、なんとなくバックミラーを覗き込んだ。

客が、一人。いつのまにやら後部座席に座っている。

「どちらまで？」

「世界の果てまで」

クリスは聞いたことのあるセリフだと思った。しかし、“あの娘”はもういない。だから、この声の主は彼女ではない。

バックミラーをもう一度よく確認する。そこに映るのは白い帽子と白いスーツがよく似合う、白髪の老人だった。

クリスはなにも言わず車を走らせ始めた。老人もそれに文句を言うことはなかった。しばらくその老人は窓から風景を見やっていたが、唐突に口を開く。

「“あの子”が悪いことをしたようだな」

クリスは、何も答えない。

「あの子は私のことを深く、家族のように、友のように、愛してくれていた。だが、それが却ってあの子を狂わせたようだ。私が安易にあの席を譲りたいと言い出さなければ、君もあの子も、このような結末を迎えることはなかっただろう。だから、私は君へ謝りにきた」

ここでもうやくクリスも口を開く。

「あんたは結局なにがしたかったんだ。それを教えてくれ」

老人は一瞬バックミラー越しにクリスの顔を伺い、そして話し始めた。

「私はもう見ての通り歳でね。疲れてしまったのだよ。神としてこの世界をずっと見てきた。幾月も、幾年も。我々は信仰があり続ける限り、そこに存在し続ける。そして、いつかは虚無に陥る。」

神の孤独を知る者もそうはいないだろう。そうして、我々は預言とともに新たな代替者を探し、選出してきた。それが君だったのだよ。クリスという名前はその為にある」

クリストファー。キリストを背負うもの。名は人の運命まで決めてしまうのか。クリスはそう思う。

「そして、君に神へなる為の試練を与えた。それが“あの子”だ。私はあの子に全てを託し、見守っていた。彼が私を信じるように、私も彼を信じていた。しかし、あの子の信じていたものは私が信じているものとは違った。あの子は私に身を引いて欲しくはなかったようだ。だから、あの子は君を嫌っていた。君の存在を憎んだ」

「とんだとばつちりだな。俺はあんたらの勝手に色々なモノを失ったよ」

「ああ、だから謝罪をしにきた。君には本当に悪いことをした。全ては私が諸悪の根源であり、全て私の失態だ。こんな私を、赦してはくれるだろうか？」

クリスは黙った。黙々と車を走らせる。しかし、わずかの逡巡ののち、それに答えた。

「俺はあんたを“赦す”よ。俺はもうなにも恨んでなんかいない。みんな罪人なんだよ。あんたも、俺達も」

「そうか……そうかも知れないな……」

そこから二人の会話は途切れた。黙々と走り続けていた車は街を一周し、元の場所へと戻ってきていた。

クリスは車を停める。もう話すことは何もないという意味表示だった。

しかし、その老人は口を開く。

「神には、なりたくはないかね」

その声はどこか悲しげで、哀願するような声だった。

クリスは答える。

「なる気はないね。俺はただのクリスだよ。何者でもない、しがないタクシーの運転手さ」  
老人はそれを聞き、少し微笑んでみせた。

「そうか、残念だ。では私はもう少し神を続けよう。私も罪を贖いながら生きていこうと思う。では、最後に——」

神は少しの間を開け、言葉を紡いだ。



「君の願いを聞こう。それがせめて、君への報いだ」

クリスは少し考えた。クリスの願いとはなんだろうか。クリスがいま叶えたい願いとは。「そうだな……。じゃあ、俺があんたへそうしたように、俺のことも“赦してくれ”。そして、アンジェリカの元へ俺を連れて行ってくれないか」

白髪の老人はゆつくりと頷き、クリスの肩へ静かに手を置いた。

「私は君を赦す。成し遂げられた」

そう言い残し白髪の老人は静かに消える。

そして、  
運転席にはハンドルへ身体を預け、  
静かに眠るクリスの姿だけが残った。

あとがき

とある少年は高校生の時分に病気をこじらせておりまして。

彼は『にるばあな』というバンドに出会ってからその病気をさらに悪化させて行きました。そして、彼は高校二年の夏休み前、三者面談にて。「俺は伝説のロッカーになるッ!」と宣言したのであります。その場にいた父親と先生の顔が今でも忘れられないと彼は懐かしそうに目を細めるのであります。それからというもの、実質中卒という称号を肩に背負い二十五の歳まで何者にもなれず生きながらえているという風の噂でございます。

夏に持ってこいな怖い話をしました。どうも、ひものです。

あとがきで言うことはさほどありません。一切は過ぎていくのです。ただ、少し。この作品に関して言うなれば。

自分にとって初めてまともに書いた小説です。当初は自分の人生を賭してこの小説を書くかと思ひ、全ての方へ謝罪をと罪滅ぼしの為に作り出した作品です。

しかし、こちらが一方的に謝罪しようとも、聞くもの見るものがいなければそれはただの独り言にしか過ぎません。ですから願わくば、誰かの目耳に届けばいいなと思います。最後になりますが、今回絵師を担当してくれたGooさんに感謝の言葉を。

「正直、すまんかった」

これに尽きます。今後とも良き関係でいられることを切に願っております。

次回作、というものに目処は立っております。このサークル自体なんだかふわふわとしています。夢幻泡影の如し。人生とは儚いものです。

それでも、何かを残していければいいなと淡くも思っています。

おちんちんびろん。

Alice.lips ひもの

TwitterID (minamo\_i)

All Apologies

Alice.lips

s 2016/08/15

**Alice.lips**

<http://alice.fail/>